

リレーエッセイ  
海外派遣  
専門家たより

たぶちとしお  
田渕俊夫  
東京藝術大学理事・副学長

# 日本に残った アジアの絵画技法を モンゴルに伝える

ウランバートルで日本画セミナー・ワークショップを開く



ワークショップでは箔の張り方の実演など、日本画の技巧を伝えた。講師を務める筆者のテーブル奥で熱心に見つめているのはカルマンダハ教授  
写真提供：筆者（以下も同じ）

22日午後10時を過ぎたころでした。在モンゴル日本国大使館の小山さんの出迎えを受け、車に揺られて明かりの少ない街並みに異国情緒を味わいながら、これから6日間滞在するチンギスハンホテルに向かいました。

9時からモンゴル芸術大学のブマンドルジ学長、カルマンダハ教授、通訳の服飾が専門のサルナイ先生、JICAから派遣されている谷口昌子さんと顔合わせをしました。モンゴル芸術大学は今年創立62年で、教師陣はかつての社会主義体制の影響なのか、ロシアや東ヨーロッパ、特に東ドイツで学んだ人が多いようです。学生は4〜500名ほどで、外国からの留学生も多いといえます。

10時から学長、市橋康吉駐モンゴル日本国特命全権大使の挨拶があり、いよいよセミナーの開始です。120人以上収容できるモンゴル日本センターのセミナー会場は満席でした。私はプレゼンテーションソフトを使った映像や、日本から持参した絵具や膠、筆など

ジヤパンファウンデーションから、「モンゴルにおける日本年（日モンゴル外交関係樹立35周年）」に合わせて、日本画セミナー・ワークショップを開きませんか、というお誘いを受けました。日本画は、その素材や技法が千

でも類をみない長い歴史を誇る絵画様式です。中国や朝鮮半島には、同じ素材や技法で描いた敦煌や高句麗の壁画などが残っています。現在ではその素材も技法も継承されていません。モンゴルでもかつては日本画と同じ素材や技法で絵を描いていたはずですが、

で、現状はどうなのか、とても興味がありました。私と、東京藝術大学大学院美術研究科の文化財保存学専攻 保存修復 日本画研究室の劉煥泉、狩俣公介両君の3人が成田からウランバートルに着いたのは、07年10月



120人収容のモンゴル日本センターのセミナー会場は受講者で満席。日本画の絵具などの特徴や、模写の描き方、修復の方法、日本画の歴史などを解説。受講者は熱心に聴き、関心の高さがうかがえた

を前にして、日本画について解説しました。

通訳を通さなければならぬので、時間がかかりますし、内容も特殊な用語が多くて、出席者に理解されるか心配でしたが、通訳を担当してくれたサルナイさんと谷口さんの適切なモンゴル語の表現によって、十分に理解されていることが会場の熱気から伝わってきて、ホッとしました。

昼食後は、明日から始まる日本画ワークショップのためにモチーフを探しに市場へ行き、バナナやリンゴ、ブドウなどを買って準備は整いました。

## 翌日

日から、いよいよワークショップの開始です。定員25名ということでしたが、受講生が続々と集まりだし、あつという間に全席がいっぱいになり、受講を希望しながら叶えられなかった人が周りに10人以上います。ワークショップに協力していただいている先生方はとても熱心で、特にカルマンダハ教授はご自身が伝統的なモンゴル画の指導をされていて、日本画の絵具に強い関心を示され、いろいろと質問をしてくま

す。教授によると、現在は描き方を伝統的な様式で指導しているが、絵具はチューブに入った中国製の顔料絵具を使用しているとのことでした。私が絵具について説明すると、いつの間にか周りに受講生や若い先生方が集まってきて熱心に聴きます。とても充実した授業が続きました。

## 日本画の絵具

本画の絵具は、天然の鉱石や土や貝殻などからつくられる最も原始的なもので、絵具に利用できるものは案外と身近にもあります。特に現在のモンゴルでも膠や明礬が使われていますので、十分に下地はあります。例えばモンゴルでも手に入るウコンやサフラン、あるいは木の実などから取った染料系の色素を、明礬を使って焙煎したり、胡粉に染み込ませたりして顔料化すれば、絵具として使えます。

実際に今回のワークショップに協力していただいた市橋大使夫人が、在モンゴルインド大使館などに問い合わせ入手したウコンや、谷口さんが用意してくれたサフランはきれいな黄色の絵具となり、モチーフとして用意したバナナなどの彩色に使われました。

また、モンゴルにも金箔があるということでしたので、蜂蜜を使って金泥をつくる実演をしたところ、若い先生が非常に興味を示し、見事に金泥をつくり上げました。モンゴルのいろいろな場所の美しい土を選んで精製するなど、

工夫すれば絵具として活用できる素材はいくらでもあるはず。私はそのことを何度も強調しました。

今回の日本画ワークショップが、今後のモンゴル絵画にとつて少しでも参考になったとしたら、これ以上の喜びはありません。



今回セミナーワークショップに参加したメンバー。右から狩俣公介氏、筆者、劉煥果氏

たぶちとしお ● 東京生まれ。東京藝術大学大学院修了。1995年より同大学院美術研究科教授、2005年より現職。02年に大本山永平寺不老閣相見の間襖絵「春秋」「雲水」、04年に鶴岡八幡宮齋官（貴賓館）上座ノ間襖絵「美しき大地」を制作。現在、真言宗智山派総本山智積院講堂襖絵を制作中。06年より日本美術院理事も務める